大学等・一般の部　最優秀賞［大分県教育の日推進会議会長賞］

「こころが還る場所」 それが私の「ふるさと」

大分市　朝木（あさき）　孝枝（たかえ）

ふるさと…そう言われて多くの人が思い出すのは、自分が生まれ育った場所ではないだろうか。私が生まれ育った場所は、臼杵市である。子どものころに遊んだ臼杵公園、臼杵川の河口、八坂神社、二王座。すべてが「ふるさと　臼杵」の情景である。それはもちろん、一生私の中で残っていくに違いない。しかし、今、私が「ふるさと」といって思い浮かべるのは、「こころが還る」場所である。「かえる」には、様々な漢字があるが、私が「還る」としたのは、辞書で、「多くの地点を経由したり様々な過程を経たりして、根源となるところへ戻ること」が「還る」の意味であることを知ったからだ。

私は「おかえりなさい」という言葉が大好きである。小学校のころ、母は二交代で働いていた。早番の日は、私が帰った時に「おかえり」と迎えてくれるのが本当にうれしくて、隔週である母の早番の日がとても楽しみだった。私は1987年に養護教諭として勤務しはじめ、両親と３人で暮らしていた。そして2007年に父が、2008年に母が、立て続けに他界した。特に母は、病気がわかって一月半でこの世を去った。父が亡くなった後、母の「おかえり」が、父のいない寂しさを補ってくれた。しかし、母が入院し、「おかえり」が聞かれない家に帰るのが寂しくて、母の「おかえり」を動画に撮った。「おかえりなさい。今日も一日ご苦労様。」母はカメラに向かってそう言って笑った。その後、急激に母の病状が悪化し、私は初めて介護休暇を取得した。もうあと数日かもしれないという日、夕食を食べ、母の病室に戻った私に、母は「おかえりなさい。」と言ってくれた。これが生きている母の最期の言葉だった。

私は今まで、長期の休暇を取得したことはなかったが、母の介護休暇ではじめて長期の休暇を取った。しかし、母の病状悪化が早く、３週間の休暇だった。ただ、３週間も仕事を休んだことはなく、職場復帰の日、「子どもたちは私を覚えてくれているかなぁ。」と不安を抱え学校に到着した。すると、私の車を見て子どもたちが「先生、おかえり！今日から来れるの？」と走って私のもとにやってきた。子どもたちの「おかえり」の言葉に、「私には、還る場所がある。私は独りじゃない。」と涙が出た。

さまざまな子どもたちと出会い、「こころが還る」場所、「こころのふるさと」があるということは、頑張る力になったり、心身が安定する力になったりするように思う。しかし、そのような場所が見つけられない子どもたちもいる。私は、卒業する前の子どもたちに「いのちの授業」をしている。私の生い立ちから、いじめをした、された経験、看護学校時代に出会った生と死、両親の死、いのちのつながりなど語り、最後は、「今、保健室に来る人に、私は『おかえりなさい』とは言わない。それは家庭や教室であってほしいから。でも、卒業して、社会に出て、自分は独りぼっちだ、死にたいとか思うことがあったら、朝木保健室に戻っておいで。その時は『おかえり』って迎えるからね。」と話している。母や教え子たちが私に「ふるさと」を感じさせてくれたように、私も、子どもにとって「こころが還る」場所、そう「こころのふるさと」のような存在でいたいと思っている。

今年、30年以上前の教え子の保護者から、子どもが会いたがっていると連絡があった。その子どもから届いたメールには、「朝木先生に会いたいと思った自分は、きっとまだ人生をあきらめたくないと思っている自分なんだと気づかされる。」と書いていた。嬉しかった。ひとりの子どもでも、私の存在がその子の「こころのふるさと」のひとつになっているとすれば、その子どもの存在もまた、私の「こころのふるさと」なると気づかされた。

先日、母の「おかえりなさい」の動画を見た。やはり、「ふるさと」に還った気持ちになった。「こころが還る」場所、「ふるさと」の存在を大切に思いながら、残り少なくなった養護教諭としての日々を歩んでいきたい。